
魔法少女リリカルなのはメダルを使う転生者

カテナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはメダルを使う転生者

【Nコード】

N98200

【作者名】

カテナ

【あらすじ】

神のうっかりで死亡してしまった青年空海^{くうかい} 陸^{りく}。元の世界に戻ることができず変わりにリリカルなのはの世界に転生することになった。彼は神から能力を与えられるとこのことで選んだのは仮面ライダーオーズの力とデバイスと魔力を選び、リリカルなのはの世界へ行く。彼は神からもらった力でこれからなにをするのだろうか？なお、主人公は原作知識はデバイスを使って魔法を使用することぐらいしか知りません。初作品なので読みづらいかもしれませんが、なにとぞよろしく願います。

プロローグ（改）

「……ここどこだ？」

初めまして俺の名前は空海^{くうかい} 陸^{りく}いきなり暗くなって次に目を開けて
みたらそこは何もない真っ白な空間だった。

「さて、どうして俺はここにいるんだ？」

確か俺は家を出てすぐに意識を失ったんだよな。そのとき何があったんだ？

「おゝい」

後ろから声が聞こえたので振り向いてみると、なにやら白い服着て
ひげがあるおじいさんがいた。

「あなたは？」

「ワシはこの世界の神じゃ」

「そうですか。それでなんで俺はこの空間にいるんですか？」

「それはワシがおぬしをうっかりで殺してしまったからじゃよ」

「あんたのせいだよ。それで、俺はこれからどうなるんだ？」

「それなんじゃが、ワシのせいで死んでしまったからの。別世界に

転生することにしたのじゃ」

「転生ね、元の世界には戻れないのか？」

「あいにく元の世界のおぬしの体は既になくなっておつての、それに一度死んだ人間を元の世界に返すことは不可能なのじゃ」

「そつか。まあ物は試しで聞いてみただけだから予想はできてたけど、それでも悲しいな。もう会えないとなると」

そう言い、俺は元の世界の友人や家族を思い浮かべた。

「すまんの。わしのせいで家族とも会えなくなって」

「いいよ。もう過ぎたことだから。それよりどの世界に行くのかは決まっているのか？」

「うむ。リリカルなのはの世界におぬしを転生させることにしたい」

「リリカルなのはってアニメのか？」

「そうじゃ。」

「だけど、俺は原作は見てないし、ごく一部しか知らないから何が起きるかわからないぞ？」

「それに関しては安心せい。向こうに言ったらおぬしの頭に情報は入れておくからの」

「それは助かるな。それじゃそろそろいいか？」

「いやその前に、おぬしに能力を与えようと思うんじゃが」

「能力？」

「そうじゃ。それでどんな能力がいいのじゃ？全部で五つまでなら叶えられるぞ」

「それじゃ、一つは向こうの世界に行っても元の世界の記憶があること。二つ目には、まあ容姿はいいほうにしてくれ。三つ目にデバイス。これは二つ欲しいな。一つはサポート用に。四つ目に魔力だな、なるべく多いほうがいい。最後に仮面ライダーオーズの力が欲しい。コレで言いか？」

「わかった。この四つじゃなしかし、三つ目までは分かるのじゃが四つ目はまだオーズのメダルは全部出てきてないがよいのか？」

「ああ。今出てる分で大丈夫と思う。それと新しいメダルが出てきたら送ってもらえないか？」

「まあそれならよいじゃろ。ではコレでよいな？」

「ああよろしく頼む」

「あい分かった。それではおぬしを向こうの世界に送るぞ。おぬしの後ろにゲートを作っておいたからそれを潜れば向こうの世界に付けるぞい」

そう言われて振り返ってみると確かに光で作られたゲートがあった。

「そうかありがとう」

俺は神に礼を言っつてそのゲートを潜ろうとした

「最後に聞きたいんじやが、おぬしはどうしてワシを怒らなかつたんじや？普通ならそんな理不尽なことで殺されたのなら怒るはず」「怒ってるよ。それはもうあんたを殺したいくらいに」ならなんで何もしないんじや！？」

「何でつて、そんなことをして、なにかなるのか？元の世界にでも帰れるのか？違うだろ。だったら俺は事実には納得をして次に進むだけだ。今の自分にできる精一杯のことをしてな」

そういつて俺はゲートを潜った。

「ワシはおぬしの様な考えはできんよ。しかし、おぬしには感謝もしている。おぬしにどうか幸あらんことを」

そう神が言っているのを聞きながら俺は意識を失った。

プロローグ（改）（後書き）

初めましてカテナです。今回この小説を読んでいたいてくださってありがとうございます。初めての投稿なのでつたないですがよろしく願います。

プロローグその2 陸、目覚める（改）（前書き）

「ども。作者のカテナです」

「陸だ。さて前書きではなにをするんだ？」

「特に何をするかは決めてないんだが、とりあえずは陸と話をしながら進めてくさ。」

「そうか、まあ今は何もないから本編に移るぞ」

「そうだね。それでは魔法少女リリカルなのはメダルを使う転生者」

「始まります」

「ちなみに陸の苗字が変わります」

「それは早く言え！」

プロローグその2 陸、目覚める（改）

（ん、ここは？）

意識が戻ってからすぐに見たものは知らない天井だった。

（そうか、俺は転生したんだっとな）

そう思っただけを動かそうとしたがうまく動かなかった。何でだと思っただけを探ってみて分かったのは、自分が赤ん坊になっていたことだった。

（な、なんで赤ん坊になってるんだ！？ってそうか転生したから赤ん坊から始めなきゃならないんだ）

そう納得して俺は赤ん坊の体で自分の意識があることに嘆いていた。

（赤ん坊からって事は着替えとかご飯とかトイレも自分でできないから親にやってもらうんだよな。うわ、恥ずかしい）

今後来るであろう羞恥に内心もだえながら数分後、俺は今後のことを考えることにした。

（確か情報は俺の頭の中に入ってるって神が言っていたから探ってみるか）

俺は神との会話を思い出しすぐにこの世界に関する情報を頭の中から探してみた。

（ふむ、なるほどこの世界はこういう風にできているんだな。となると、実際に動くとしたらこの世界の主人公が魔法を手に入れてからだな）

しかし、それ以外にも問題があった。それはこの世界の主人公、つまり高町なのはの年齢が分からない事だ。

（確かに情報はありがたいが肝心の主人公の今の年齢が分からない以上動くに動けないぞ）

とは思ったものの今の自分の状態じゃ何もできないからどうしようもないんだがとりあえず今はそのことを考えずに新しい生活に目を向けることにした。

「あら、起きた？」

「う？（え？）」

ふと声が聞こえたので首を動かそうと思ったが、首がまだすわってないため動けないことを思い出した。

「おはよう」

すると声の主であろう女の人はこちらにやってきた。おそらくこの女の人がこの世界での俺の母なんだろう。

「あなたの名前は陸よ。 神名 陸。よろしくね」

「あーうー（こちらこそ）」

うまく声が出せなかったがこちらの言いたいことが分かったのだろ
う、母はうれしそうに笑っていた。

こうして俺はこの世界で空海 陸ではなく神名 陸として過ごす事
になった。

プロローグその2 陸、目覚める（改）（後書き）

「どうも。作者のカテナです」

「この話から苗字が変わった神名 陸だ。改めてよろしく」

「さてコレでプロローグは終わったから次は陸が神からもらったデバイスに名前を付ける話にするよ」

「そういえば、俺のデバイスの名前って決まったのか？」

「うん。まあ決まったのは決まったけど、次の話の内容がまだできてないんだよね」

「おいおい。ちなみにどれぐらいできてるんだ？」

「全体の半分ぐらいだな。敵に関してはできてるけど」

「どんな敵が出てくるんだ？」

「うん。今出す予定なのは他の仮面ライダーの敵キャラなんだよね」

「どうしてまた。ヤミーはどうするんだ？」

「うん。ヤミーを出すのは決まってるんだけど、グリッドをどのタイミングで出すかで悩んでるんだよね」

「ああ、今出てる話で登場してる敵キャラの数が少ないのと、はな

しがつづかないからか？」

「そうなんだよね。以前書いてた設定だと問題点が出てきたからね。その後指摘をしてくれた三龍様に既に返信したけどもう一度」

「「ありがとうございます！！」」

「それでつなぎにほかのライダーの敵キャラを出すと？」

「つなぎというか原作の流れのまま出すのだとオーズの登場が少ないからね。対策は打ってあるけど」

「どんな？」

「それは秘密。さて話が長くなったのでそろそろあとがきを終わります」

「この話を読んでくれた人に感謝をそしてコレを読んでなければ感想をください。」

「それでは、次回の魔法少女リリカルなのはメダルを使う転生者第一話」

「陸、相棒に名前を付ける」

「「「よろしく願います」」」

第一話 陸、相棒に名前を付ける（前書き）

「こんにちはカテナです」

「陸だ。今回の話では俺の相棒が出るみたいだな」

「そうだよ。デバイスの名前は本編で出すけどね。」

「ちなみにデバイスとオーズの力はどういう風に使うんだ？」

「それは秘密で。では魔法少女リリカルなのはメダルを使う転生者」

《始まります》

「台詞とられたー!!」

第一話 陸、相棒に名前を付ける

俺がこの世界に転生してからだいたい五年ぐらい立った。

この五年間で初めてのころはすごく恥ずかしいことばかりだったのでさっさと記憶から消したいものだ。

「陸、朝ごはんできたから降りてきなさい」

「あ、はい」

と今までのことを思い返しながらぼっとしていると下から母・もとい、母さんの声が聞こえたので返事をしてから俺は下に降りた（ちなみに我が家は二階建てで俺の部屋は二階にある）。

「おはよう、お母さん」

（この人の名前は神名^{かみな} 亜季^{あき} 俺の母さんだ。）俺は台所に立っていた母さんに挨拶をした。

「おはよう陸。朝ごはんは机の上においてあるから先に座っていなさい。お母さんはもう少ししたらそっちに行くから」

「わかった」

そっいつて俺は机のほうに向かつて近くにあってたイスに座つた。すると目の前のイスに座っていた父さんが声をかけてきた。

「おはよう陸。昨日はちゃんと眠れたか？」

（この人は神名^{かみな} 祐樹^{ゆうき} 俺の父さんだ。）

「うん、おはようお父さん。僕（今の歳で俺はないと思ったため一人称は変えた）ね後で公園に行きたいんだけどいいかな？」

「うーん、僕はいいいけれど、亜季さんに聞いてみるといいよ。僕だけで決めていいものじゃないしね」あら祐樹さん何の話をしているんですか？「おっ、噂をすればだね」

そういつて母さんがやってきた。

「？祐樹さん何が噂ですか？」

と母さんが首を傾げて聞いてきた。

「ああそれは食事をしながら話すでしょう。皆席に着いたね？それでは」

「「「いただきます」」」

そういつて食事を開始した。食事をしながらすぐに父さんはさっきの話を母さんに話した。

「そうですね、お家に一人でいるよりはいいと思いますし、何よりお友達もできるかもしれませんからいいですよ。ですけど公園に着くまではお母さんと一緒に行きましょうね？」

「わかったよ。お母さんありがとう！」

俺は笑顔でお礼を言った。すると母さんは笑顔で「まあまあ」とか

言いながらどこかに旅立ったようだ。ちなみに俺の両親は二人と今から仕事で帰ってくるまでは俺一人になる。（今日は日曜のため、保育園は休みだ）

「さて、それじゃあ陸。僕は先に行くけど、ちゃんと気をつけるんだよ。途中までは亜季さんが一緒だけど、公園に着いたら一人なんだからね」

食事を終えた父さんはそれでも心配なようで僕に言ってきた。（このとき母さんはスルーしている）

「うん。公園に着いたらなるべく多くの人がいるところに行ってください。それなら大丈夫でしょ？」

だから俺は父さんを安心させるようにこう言った。（もちろん俺もスルー）

「それならいいよ。それじゃ行って来るね」

そういつて父さんは席を立って玄関に向かった。

「あ、祐樹さん待って」

そういつて母さん（どうやらいつの間にか戻ってきたようだ）はそういつて父さんに近づいた。

「ああそういえば忘れるところだったよ。行ってきます亜季さん」

「行ってらっしゃい祐樹さん」

そういつて父さんと母さんは玄関でいわゆる行ってきますのキスをして父さんは仕事に向かった。

「さてと、それじゃ私たちも食器を洗い終わったら支度をして行きましょうか」

玄関から戻ってきた母さんは素晴らしいながら食べ終わった食器（自分の分を含めて）を持って台所に向かった。

「あつ、う、うん分かった（いつの間に食べ終えたんだ？確かまだ残ってたはずだったんだけど・・・汗）」

俺は急いで食器に残っていた料理を食べ終えて食器を台所に持っていった。

・・・母さんがいつ食べ終えたのかは気にしないことにした。

食事を終えてから数分後。俺は母さんと手をつなぎながら（恥ずかしい）公園に着いた。

「それじゃ陸、お母さんは仕事に行くから気をつけてね。それとお昼の分は用意ができてないからお金を渡しておくからどこかで食べてきてね。それから怪しい人とか変な人とかに何か言われても着いて行っちゃだめよ？いいわね？」

「うん分かったよ」

俺は母さんからお金といくつかの注意を聞いて返事をすると思心したのか「じゃあ、いつてくるね」といって仕事に出かけていった。

「さて、とはいったもののどうするかな」

ちなみに公園にはまだ誰もいなかったりするんだな、これが。

「とりあえずブランコにでも乗る【ピカーーー!!!】うわっなんだ!？」

突然目の前が光って俺は目を開けることができなかった。目を開けたときには光は消えていてまるでさっきあったことが嘘のようだったかのように何も変化はなかった。

「ふう。今のは何だった《《マスター》》またかよ、今度は何だ!？」

光がやんだと思ったらいきなり声が二つ聞こえたので俺はびっくりしてつい大声を上げてしまった。

まだ朝だというのにご近所の皆さん申し訳ございません。

《《マスター、下を見てください》》

「下?」

となぞの声×2が聞こえたので下を向いてみると、

「ペンダントに、腕輪?」

そこには十字架の形をしたペンダントと全体が銀で一部に赤・黄・緑が使われている腕輪だったのだ。

「なんでペンダントに腕輪が・・・ってデバイスか」

俺は何で喋っているのか気になったがそれがデバイスだったことに気がついた。俺はペンダントと腕輪を手にとって

「俺のことをマスターと呼ぶって事は、お前たちが俺のデバイスなんだな？」

と聞いてみた。

《《そのとおりです。マイマスター》》

「ちなみに聞くけどお前たち名前は？」

《私たちに名前は存在しません。ですからマスター》

《あなたが僕たちに名前を下さい》

「俺が？いいけど、お前たちはそれでいいんだな？」

《《はい。》》

「わかった。それじゃ、ペンダントの名前はアイネ。腕輪の名前はライトだ。」

《《デバイス名登録完了。マスターありがとうございます。》》

「どういたしまして。これでデバイスに関してはOKだな後は、オーズの力なんだが・・・」

《それなんです、マイスターからの伝言で「オーズの力はおぬし
の意思で任意に出せるようにしたぞい」とのことです》

「そっか、ありがとな、ライト」

《お役に立てて幸いです。》

トワイライトに礼を言ってから俺は伝言どおりにオーズのベルトを右手に出せるか試してみた。

（出る）

そしたら数秒もたないうちに右手にはオーズのベルトが現れた。

「おお、ほんとにでた！！」

俺は少し感動した。後は実際に变身してみたいがそろそろ他の保護者連れの子供が来そうなのでベルトをしまった。

「とりあえず今試してみたいことは大体できたから残りは家で試してみるか。お前たちにも聞きたいことがあるしな」

《《分かりました。何かあればいつでも呼んでください》》

「ありがとな」

俺は礼を言ってからアイネとライトを身につけた。

「良し。後は昼まで何してるかなって」

公園の入り口から子供連れの母親方が話をしながらやってくるのを

見ながら昼まで何をするのか考えながら空を見上げていた。

（後編へ続く）

第一話 陸、相棒に名前を付ける（後書き）

「ども力テナです」

「陸だ」

「さてこれからの更新は不定期になりがちになるかもしれませんがここをここに宣言します」

「大変だなお前も」

「そうだね今は資格取得のための勉強もしてるから更新が遅くなってるんだけどね。それでも力テナさんは頑張って完結目指します！」

「頑張れ。頑張れついでにこの作品はどこまで続くんだ？」

「今は一応無印まで。A s編はできてないからね。敵キャラの事も考えいといけないから」

「敵キャラはどんなのだすんだ？」

「主にファイズやキバの敵キャラ出そうと思ってる。ヤミーは無印でも出すけどあまり出すことはできないかな。今出てきてるヤミーの数も少ないし」

「そうか。それじゃそろそろ閉めるぞ」

「そうだね。それでは次回魔法少女リリカルなのはメダルを使う転

生者」

「第二話 遭遇」

「次回もよろしくお願いします」

第二話 友達になろう(改)(前書き)

「久しぶりの更新です。作者のカテナです」

「陸だ。して敵キャラのことについてはどうなったんだ?」

「それはgoodさんの意見を貰って、グリードとヤミーは出さないことにしました。goodさん」

「「ほんとうにありがとうございました」」

「それでは本編をどうぞ。」

「魔法少女リリカルなのはメダルを使う転生者」

「「始まります」」

第二話 友達になろう(改)

「さてと、もうそろそろ昼だな、どこで昼飯食べるかな」

俺は公園にある時計をみてもうすぐ昼になることに気づいた。

お金は渡されているので昼飯を買おうと思うのだが一人だとなにぶん不自由なことがあるのだ。

「だからといってコンビニの弁当で済ませるとしても栄養が偏ってるから食べたくないしな」どうするか

そんなわけで俺は今日の昼飯をどうするか考えながら公園を出た。

《ところでマスター》

「ん？どうしたアイネ？」

俺は首からぶら下げているペンダント型のデバイス「アイネ」に呼ばれたので返事をした。

《マスターにはこの世界についての知識はどれくらいあるのですか？》

「そつだな神からもらった知識も含めると、

？、リリカルの世界は無印・A・S・S・t・sの三期あり、そのうち無印の事に関しては大体分かる。

？、魔法を使うにはデバイスという機械が必要。コレに関してはお前たちがいるから問題ない。

？、原作主人公の高町なのは魔王であること、以上の三つだな。
しかし、今上げた内の二つ目までは分かるが三つ目の意味が分から
んな。どうして魔王なんだ？」

《私にも分かりません。ですがなぜ無印だけの知識しか与えてない
んでしょうか？》

「多分だが、無印以降のことに關しては自分でどうにかしろって意
味だろ。無印の知識を与えたのは俺がこの世界に關しての情報を持
ってなかったのと知識を与えてないと原作介入に遅れるからだと思
うな。あの神様俺を最初から介入させるつもりだったみたいだから」

《どういうことですか？》

「まあ簡単に言えば始めから介入させてどっいう風に原作を変える
のかが楽しみだからだろ」

《そっいうものなのですか》

「そっいうものなのさ、これがな。さてと、それじゃ昼飯を食べに
行くか」

《場所はどこですか？》

「喫茶翠屋。主人公高町なのはの両親が経営している店だ」

そっいうて俺は翠屋に向かった。

10分後・・・・・・・・

「着いたな、ここが翠屋か。綺麗なところだな」

俺は翠屋の中に入った。

カラン・カラン」

「いらっしやいませ、あら？僕一人なの？」

そういつて俺に声をかけてきたのは高町家の母、高町桃子さんだ。

「はい、両親は共働きで今朝早かったのでお昼ご飯を作れなかったそうので僕にお金を渡した後これで何か食べてねって言われたので近くを散歩してたら偶然ここをみつけたので入ってみました」

「そうなの。それじゃこの席に座ってね」

そう案内された場所はカウンターの席だった。

「それじゃ、何か飲み物はいかがかしら？」

メニューを渡された後そう聞かれたのでとりあえず「オレンジジュースをお願いします」と答えた。

「はい、どうぞ。それじゃまた後でね、いらっしやいませ」

と新しいお客さんがきたので桃子さんはそっちの接客に向かった。

「うん。あの容姿で母親とか思えないね」

俺は桃子さんを見ながらそう思った。何せ大学生だといわれたらそのまま納得してしまうほどの若さだからなあ。

「あら、それは嬉しいわねえ」

「……声に出してましたか？」

「ええ。でてたわよ」

「（直したほうがいいな。これじゃおちおち考え事もできない）あ、すみません、サンドイッチもらえますか？」

「分かったわ。サンドイッチでいいのね？」

「はい、お願いします」

注文を頼んだ後サンドイッチがくるまで俺はオレンジジュースを飲みながらボーっとしてた。

「お待ち同様。サンドイッチよ」

「ありがとうございます。それではいただきます」

そういつて俺はサンドイッチを食べ始めた。
食べている間なぜか桃子さんがカウンターを挟んで向かいにまわって俺を見ていたので気になったので聞いてみた。

「あの、何か用ですか？」

「ええ、ちょっとお願いしたいことがあるんだけどいいかしら？」

「いいですけど、どんなことなんですか？」

「別にたいしたことではないんだけど、うちのなのはと友達になつてくれないかしら？」

「なのは？」

「あつごめんなさいね。なのはわたしの子供達の中で一番下の娘なの。歳は君と同じぐらいだけど、私や他の子供達も忙しくてなのはにかまって上げられなくてね、そこで君になのはと友達になつて欲しいんだけどいいかしら？」

「いいですよ。ところでそのなのはって子は今どこにいるんですか？」

「なのはは多分家にいると思うわ。後私の家はここから……」

俺は高町家の家の場所を教えてもらった後残つてたサンドイッチを食べて翠屋からでた。

高町家に到着――

「さてと、いるかな？」

俺はそばにあつたインターホンを押した。

「はい」

玄関からそんな声と鍵を開ける音がした。

「??どちらさまですか?」

玄関から出てきた髪をツインテールにした女の子は首を傾げながら
そう聞いてきた。

「はじめまして。ここに来る前に翠屋にいつてねそのときに桃子さんに君と友達になってくれないかなって聞かれたんだよ。それで僕も友達が欲しかったから、OKしたんだ」

「そうなの。はじめまして、たかまちなのはです。なのはってよんでほしいなの」

「わかったよ、なのは。僕の名前は神名 陸すきによんでいいよ」

「わかったなの。それじゃ、りつくんってよぶなの」

「わかったよ。よろしくねなのは」

「うん。こちらこそなの」

そういつてなのはは笑顔でそういつた。

「それじゃうちにあがってなの」

「ありがと、なのは。おじやまします」

そういつて俺は高町家に上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9820o/>

魔法少女リリカルなのはメダルを使う転生者

2011年10月8日07時38分発行